
僕とキミの召喚獣

鍼灸院

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

僕とキミの召喚獣

【Zコード】

Z4081P

【作者名】

鍼灸院

【あらすじ】

観察処分者となつた吉井明久とオリキャラが織り成すもう一つのバカラス物語。

明久のもう一つの人格となつた春香により、明久は生まれ変わつてゆく。

一話あたりの分量がバラバラですがご了承願います

第一問（アロローグ）（前書き）

はじめに一言。

このような作品を選んでいただいてありがとうございます。

作者は連載は初めてで一話あたりの内容は少ないと思いますが、頑張つて行こうと思います。

それでは！

『僕とキリの召喚獣』

略して『僕キリ』の始まりです！

第一問（プロローグ）

一年生の時に葉月との一件が原因で文月学園始まって以来初の『観察処分者』に認定された吉井明久。

そして罰として教師の雑用を手伝わせる為、『フィードバック』が彼の召喚獣に付与された瞬間。

明久に一つの異変と出会いが待っていた。そして『彼女』との出会いにより明久に変化が現れた。

そしてその変化に自ら気付いた人間が現れたのは、それからしばらく時間が経つて彼が一年生になった時だった。

オリキャラ紹介

吉井春香（よしい はるか）

明久にフィードバックが付与された時に現れた明久のもう一つの人格。

試召システムのオカルト部分の影響を受けて誕生。性格は優しく、明久は彼女を『春姉^{はるねえ}』と呼んで慕っている。その為春香の影響を受けて原作程のバカでは無くなっている。

また未来予知が可能であり明久の不幸の芽を摘み取れる。

容姿は原作7・5巻表紙のアキちゃんの髪を胸辺りまで伸ばしたストレート。胸は平均より少し大きめで双方の同意があれば明久と身体を入れ替わることも出来る。

その際に体は女子の身体になり、任意に人格だけを変えることも可能だがそうすると人によつて言葉使いに違和感を感じる時がある。

本作品における追加変更点

・上記の三點

（バカでない、入れ替わることが可能、未来予知）

・明久の成績が春香の教育で殆どがAクラス相当。科目によつては首席まで上昇する。

第一問（プロローグ）（後書き）

次より本編のスタートです

第一問（前書き）

オリジナルバカテスト

地理

近畿地方に属する府県を全て答えなさい。

姫路瑞希の答え

京都府、大阪府、兵庫県、奈良県、滋賀県、和歌山県、三重県

教師のコメント

正解です。よく三重県が抜ける人が多いですが姫路さんは大丈夫でしたね。

吉井明久の答え

香川県、徳島県、愛媛県、高知県

教師のコメント

なぜ近畿地方と指定したのに四国地方を答えるのですか。四国地方

としては正解ですが点はあげられません。

木下秀吉の答え

京都府、大阪府、兵庫県

教師のコメント

確かに近畿地方の府県ですがこの三つだけだと京阪神と呼びます。
覚えておきましょう。

第一問

『一年・吉井明久 上記の者を文月学園指定観察処分者に認定する』

これが全ての始まりだった。

「ではこれより、吉井明久の召喚獣にファイードバックを付与する」

鉄人こと西村教諭がそう告げると、システムの開発者である学園長がパソコンを操作し、明久の召喚獣にファイードバックを設定した。

そしてその夜、明久に出会いが待っていた。

『

ねえ
』

頭の奥から声が聞こえてくる。

明久はそんな感覚にふと目を覚ますと目の前には誰も居らず、いつもの自分の部屋が目に入ってきた。

「何だろ? 幻覚かな?」

『それを言つなら幻聴でしょ。』の場面

「誰! ?」

明久はもう一度見渡すが、やはり誰も部屋には自分以外は居なかつた。

するとまた声が聞こえて来た。

『落ち着いて。大丈夫よ。幻聴でも幻覚でもないから』

『その声で少し落ち着いた明久は、この『声』が直接脳に届いていることに少し時間を要したが理解する事が出来た。』

「キミは一体誰なの？」

『私はあなたとは反対の存在。つまりもう一つの人格よ。どうやらファイードバック設定の影響でこんな状態になっちゃったみたいね』

「そ、なんだ
（処理が追いつかない）

「と、とにかくでさー。」

『何？』

「キリはなんて名前なの？」

『春香よ。よろしくね』

いつて、明久と春香の共同生活？が始まった。

第一問（後書き）

次から原作部分に入ります

第三問（原作突入）（前書き）

オリジナルバカテスト

数学（知識）

計算する時に円周率の代わりに用いるギリシャ文字を答えなさい。

姫路瑞希、

吉井明久の答え

『（パイ）』

教師のコメント

正解です。吉井君は大変よく出来ました。

土屋康太の答え

『（デサツ）』

教師のコメント

そういうえば試験中に救急車が来ましたが、土屋君が原因でしたか。

第三問（原作突入）

それから時は流れて4月。

通学路にある桜並木がまるで新入生を迎えるかのように咲き乱れる道を、一人の少年が駆け抜け抜けていった。

「ヤバイヤバイ遅刻しちゃうよー急がないとー」

『だから言つたでしょ。明日から学校だから早く寝なさいって』

「（だつて春姉、あのテレビの続きがどうしても見たかったんだもん！）」

『だつたら最初から録画しつければ良かったでしょ！ほらそれよりも学校に着いたわよ』

程なくして

。

「遅いぞ吉井！」

校門にて待っていたのは明久の去年の担任で補習担当の西村教諭であつた。

「げつ、鉄人」

「鉄人じゃない！西村教諭と呼ばんか！」

西村教諭。通称『鉄人』

トライアスロンを趣味とし、冬でも半袖の服で平然と過ごすことが出来る。同時に補習室を担当しており、試召戦争で戦死した者が戦争終結まで受ける補習は『鬼の補習』と恐れられ、逃亡者が後を絶たないが逃げ延びた者はいない。

「それよりも吉井。言わなければならぬ言葉があるだろ？」「

「え」と遅れてすみませんでした」

「吉井。保健室に行きなさい」

「合ってるでしょー？」

確かに彼は正しい返答をした。しかし返ってきたのは納得出来ない内容の返しだった。

『でもこれから見返してやれば良いでしょ』

「（もうだね。春姉ありがと）」

『どういたしまして』

「ほら吉井。受け取れ。振り分け試験の結果だ。今日からそこがお前のクラスになるからな」

「はーい」

そして彼が受け取った封筒の中には、『F』と大きく印刷された一枚の紙が入っていた。

そして、この時から彼の高校二年生としての生活が始まった。

第三問（原作突入）（後書き）

バカテストが上手く作れない

。

第四回（上クラスの教室）（前書き）

今日はバカテストはありません。

それとペースが遅くてすみませんです。

第四問（Fクラスの教室）

「これがFクラスの

教室？」

『みたいね』

明久達が見た物。

それは

、

カビ臭い畳は波を打ち、

厚さの無い座布団と、

脚の折れた卓袱台に、

崩壊寸前の教卓が、

割れた窓からの寒風にさらされ、

天井には蜘蛛の巣が張り巡り、

壁は完全に落書きで覆わされており、とても教室とは思えない『廃屋』と表現した方が似合うFクラスの教室だった。

「これが格差社会といつもののか！」

「それがFクラスです。それより吉井君。席に着いて下さい」

明久達（みんなからは明久しか見えない）がどうやら最後うらしく、担任とおぼしき男性にそう言われた。

「はい。ところで僕の席はどこですか？」

「好きな場所にどうぞ」

「席すら決まっていないのー!？」

「それがFクラスです」

「文句があんならテストで良い点取つとけ」

最後の言葉が聞こえた方へ振り向くと、明久より背が高くて去年の
クラスメイトである坂本雄一が座っていた。

「雄一もFクラスなの?」

「他にもいるぞ」

そう言って雄一指差した方へ目を向けると

。

真剣な眼差しでカメラのレンズを磨き、次に写真データの整理をしている男子生徒がいた。

「ウチモトよ」

「あう

畠田さん」

「また一年よろしくね！」

「よ、よろしく（春姉どうじょい？）」

『私に任せなさい　でも明久が言葉に気をつけていれば大丈夫なんだからね？　分かった？』

「（はい）」

「吉井？」

「何？」

「『何?』じゃないわよ。そんな所に立つてないで座つたら?」

明久は春奈との脳内会話に意識を集中させてた為、ずっと入り口付近に立つたままになっていた。

「あ、そうだね。ゴメンゴメン」

そう言つて明久は空いている席に座つた。

そしてFクラスのLHRが始まりました。
ロングホームルーム

第四問（Fクラスの教室）（後書き）

次は来年です。

それでは皆様、良いお年を？

鍼灸院

第五問（自己紹介？）（前書き）

オリジナルバカテスト

地理

『近畿の水がめ』とも呼ばれ、ラムサール条約にも登録されている滋賀県にある湖の名前を答えなさい。

姫路瑞希の答え

「琵琶湖」

教師のコメント

正解です。言い方を少し変えただけで答えが出てこないのですが姫路さんには楽でしたね。

吉井明久の答え

「宍道湖」

教師のコメント

これは島根県の湖です。というかこちらの方が知らない人が多いのに何故知ってるのですか？

謹賀新年明けましておめでとうございます。

本年もよろしくお願ひします。

では短いですが、第五問をどうぞご覧下さい。

第五問（自己紹介？）

「え～、おはよ～いぞ～こます。今日からEクラスの担任となりました
福原です。皆さん一年間勉学に励み、頑張って下さい」

福原教諭は一度黒板に振り向いたがすぐに戻り、名前を述べた。

「どうしたんだろうね？」

「黒板に名前でも書いつとしたんだる。ちなみに言つとくが、チヨークは一つも無かつたぞ」

「雄一。それ本当？」

「うう～で嘘言つても意味ねえだろ」

「確かにね

」

「（うう～まだヒヤヒヤなんて
春姉、どうしよう～。）

『（ ハア ）』

「（ 春姉？ ）

明久の問いかけに春香はため息で応えたので明久は戸惑つた。が、顔に出ないよつこにして取り敢えず静かにしていくことにした。

「それでは廊下側の人から順番に自己紹介をして下さい」

そう言われて一番前のドアの近くにいた生徒が立ち上がる。そしてその姿は明久にとっては馴染みのある姿だった。

「木下秀吉じや。演劇部に所属しておる。一年間よろしく頼むぞい」

そう言って微笑む彼の姿はびつ見てもやつぱり女子にしか見えない。

かつて新聞部が行つた「女装が似合ひの男子生徒ランキング」では、アンフェアとみなされて除外されたぐらいだ。

そして「男性」でも「女性」なく、第三の性別「秀吉」として多くの男子生徒が彼を認識している。

かつては明久も完全に「秀吉」と認識していた。

現在では何とか「男子」となっているが彼の容姿、仕草では時々自

分が間違っているのではと明久は思つてしまい、春香の悩みの種となつてゐる。

「土屋康太」

次に自己紹介したのはこれまた去年からのクラスメイトで小柄で寡黙が特徴の土屋康太だった。

ついでに写真部の部員で既に何度も大会で賞を取つてあり、将来はカメラマンになることを目指している。

更に言うと秀吉も役者の道を目指しており、Fクラスで明確な希望進路があるのは更に明久と須川を含めたこの4人だけであり、教師陣からは一日を置かれている。

「え、と、吉井明久です。一年間楽しく出来ればいいなと思つています。よろしくお願ひします」

そして明久の自己紹介が終わつた座りかけた時、教室の扉が開けて一人の生徒が入ってきた。

第六問（自己紹介？）

【えつーー?】

クラス中から声が聞こえてきたがそれは仕方がないことだった。

なぜなら教室に入ってきた女子生徒は、学年次席の成績を誇つていることはほぼ全ての生徒が知っていたからだ。

「丁度良かったです。連絡は受けていますので姫路さん、自己紹介をお願いします」

「まつはい。姫路瑞希と申します。よろしくお願いします」

そう言つて彼女が空いている席に向おうとした時に何人かの生徒が彼女に質問をした。

まあ仕方がない。確実にAクラスだろ?と思つてた人がAクラスとは正反対のFクラスに来たからだ。

最も明久は彼女が試験中に倒れて試験が無効になつた時に居合わせており、試験後に春香と共に学園長に直訴したが結果は変わること無かつた。

しかしそ次回から欠席、早退者の為に追試験を実施することが決まり、若干の改善が成されたが今度はそれが適用されることは無かつたので彼女はFクラスになつたのだった。

そして最後に雄二が自己紹介して次に福原教諭による設備の確認が

始まつた。

「皆さん各自に卓袱台ちやぶだいと座布団は支給されていますか？ それ以外で何かあれば言って下さい」

すると直ぐに何人か手を上げてその中に明久も含まれていたが直ぐに下げた。

彼の場合、直接学園長に言った方が早いからだ。

「センセー、俺の座布団に綿が殆どありません」

「我慢して下さい」

「先生、窓が割れてて風が寒いです」

「分かりました。ビニール袋とガムテープを申請しておきますので自分で修理して下さい」

「先生、卓袱台の脚が荷物置いたら折れました」

「はい我慢してください」「無理ですよ……」

福原先生。それでは授業に参加出来ないですよ。

「[冗談ですよ。瞬間接着剤とガムテープを申請しておきますので自分で修理して下さい」

「[冗談で良かつたです」

全くです。

第七問（春香と雪国）（前書き）

オリジナルバカテスト

地理（つていうか国語？）

川端康成の小説『雪国』の冒頭部分で「国境の長いトンネルを抜け
ると雪国だった」とあります。この「トンネル」は何トンネルか
答えなさい。

姫路瑞希の答え

「清水トンネル」

教師のコメント

正解です。実は本文中にはこの名前は出てこないのですがお見事です。ちなみに今も現役で使用されていますよ。

吉井明久の答え

「北陸トンネル」

教師のコメント

確かに北陸地方は雪の量がふくでこの冬前のトンネルも実在しますが不正解です。

第一問を修正して春香の容姿や詳しい変更点を追加しました。

第七問（春香と学園長）

そしてその日の放課後。

明久と春香は学園長室にいた。目の前に座っている人物は学園長にして試験召喚システムの開発者である藤堂カラルである。

「んで、わざわざ私に直接会つてまで伝えたい事つてのはなんさね？」

「はい。実はFクラスの設備の件で伝えたい事があります」

「各クラスでの設備の違いは」の学園の特徴さね。抗議なら却下だよ

「それについては仕方がないのは分かっているんですが」

そう言って明久はFクラスの今朝の「LHR終了後」の出来事を説明し始めた。

（LHR終了後）

明久（春香）の提案で少しでも環境を改善しようとクラス総出で大掃除が始まった。

しかしある程度進んだ時に須川がおかしなことに気付いた。

「なあ、窓開けて換気してるので少しカビ臭くないか?」

その言葉を皮切りに一回掃除の手が止み、そして畳からも回りこむつながり意見が出てきた。

「確かにおかしいな」

「もしやこの畳が原因ではないのかの?」

雄一も肯定し、秀吉が原因と思つた畳を指差す。

「ねぐらてみる?」

「どうせ畳も天日干しだいとこないしな。めぐらへめぐらへ

そしてある畳をぬぐつみると

。

【ギャイヤア――――――】

そこには、本来の畳の色ばかりにも残っていない、完全に
腐ついている畳の裏面だった。

「うわあ～～～

「道理で風通し【だけ】は良いはずなのにカビ臭いと思つたり」
やしきうがねえなあ」

「か、完全に腐つきつておるんや

「こへりなんでも」れはなこわよ

「勉強する以前の大問題」

「（春姉、こへり何でも）れは酷こと思つんだが

『わいね。』れじや体の弱こ子は直ぐ影響が出るわね

「（姫路さんもだね。本当は此処じゃなくてAクラスなのに）

」

『それは仕方がないわ。でも、これは交渉の余地があるわ』

「（余地つて？）」

『明久、ちょっと体を借りていいかしら?』

「（いいけど、一体どうするつもりなの？）

『（まあ見てなさい）』

「『（精神交換）』」

目を瞑り、その言葉を唱えて次に目を開けた時。二人の精神は入れ代わり、体は明久のままだが中身は春香になっていた。

ちなみに他には体のみが入れ代わる【身体交換】や、精神も入れ代わる【心身交換】があるが使ったことはない。

何故と言われても入れ代わる理由が無かつたからだ。

「明久。どうしたんだ急に？」

「え！？ いやなんでもないよ。それより掃除を進めようよ」

「？ そうだな」

こうして教室の掃除が一応終わった後、明久（春香）は学園長室に向かったのだつた。

（場所は戻つて学園長室へ）

「…………と言つわけでせめて畠だけでも交換をお願いします」

しかし学園長の返事は「却下」の一点張りだった。

「バカをいうんじゃないよ。最初に言つただろ？各クラスで設備が違う人のはこの学園の特徴さね。そんな『はい分かりました』なんて言つてあつさり改善したらそれこそ本末転倒さね。認められないよ」

確かにそれでは意味が成さない。が、学園長の説明や教育方針以前の問題が今のFクラスには一つあつた。

「確かに僕達はその学園の方針を承諾した上でこの学園に入りました。そして前年の学業が足りなかつたのでFクラスに配置されたことは紛れもない私達の努力不足です」

「理解してゐならそれにこしたこと無いさね」

「そこで自分達で少しでも環境を良くしようとしました」

「それは良い心掛けだね。感心するよ」

「ですが、畠は殆どが腐りきついてとても学生では改善出来ない状況でした」

「それで学園側で畠を替えて欲しいことでも言いたいのかい?」

「そうです。今の教室環境では体調を崩す生徒が続出してしまうです。いくら方針と言えども衛生面は最低限の整備がされて無ければ教育現場として問題があると思っています」

学園長は明久（春香）の言葉に耳を聾り、溜息を吐いて答えた。

「わかった。そこまで畠の改善しよう。但し、あくまで畠だけだしね。わかったかい!」

さすがの学園長も、ここまで言われては反論しようが無かつた。

しかし、去年観察処分者にした時とは少し違和感を感じた学園長は次に明久に問い合わせた。

「ちよつと良いかい？」

「何ですか？」

「アンタは、何者だい？」

その言葉の直後。 静寂が学園長室を襲い、 室内の空気が重くなつた
。

第七問（春香と学園長）（後書き）

意見、感想はいつでもお待ちしています。

余談ですが、今回のバカテストは高校生クイズの全国大会で実際に出題されました。

第八問（説明と選択）（前書き）

バカテスト

地理

津軽海峡の下を通り、鉄道トンネルで両端の都市の名をとつて着けられた海底トンネルの名前を答えなさい。

姫路瑞希の答え

「青函トンネル」

教師のコメント

正解です。本州側の都市の青森の「青」、北海道側の都市である函館の「函」で青函トンネルです。ちなみに使用されるレールは52.57キロメートルも継ぎ田が無く、これは世界一の長さを誇っています。

吉井明久の答え

「**関門トンネル**」
かんもん

教師のコメント

確かにこちらも海底トンネルですが、こちらは本州と九州を結んでいます。他にも新幹線専用の「新関門トンネル」があります。覚えておきましょう。

島田美波の答え

「**ユーロトンネル**」

教師のコメント

これは外国です。海底トンネルとしては合つてますが残念ながら不正解です。

第八問（説明と邂逅）

学園長室は重い空氣に包まれていた。

理由は学園長が明久に違和感を感じたからだ。

『（は　　春姉！）いつの間も学園長先生に気付かれた！？』

「（大丈夫よ。私に任せときなさい）」

そう明久に言つて、明久（春香）は学園長に向かつて答えた。

「何故そういう質問をするんですか？」

「去年と明らかに反応が大人しすぎるんだよ。前は子供みたいに騒がしかったのにね。どうも違和感を覚えるんだよ」

また、部屋の空気が重く普通の人なら逃げたしても可笑しくない状況になる中。

学園長はまた問い合わせる。

「アンタは何者だい？」

「私は、明久のもつ一つの人格と呼べる存在です」

春香は重いの存在を学園長にこいつに伝言した。それには明久の未来が少しでも良くなればとの願いが込められていた。

『（春姉——！？ なんで言つちやうの！？）』

当然。明久は戸惑いを隠せずにパニックになり、春香に問いただすが返ってきた返事は。

「（大丈夫よ。それこいつしておけば何かと安心出来るわよ。）」

『（ホント に？）』

「（お姉ちゃんに任せたおもなごこ）」

「それで？ そのもう一つの人格とやらは何て呼んだらしいんだい？」

学園長はあまり動搖していなかった。まあ試召戦争のシステム自体が科学技術とオカルトの融合によつて成立したシステムであり、特に開発主任であつた学園長はオカルトにも慣れていたので驚くことは無かつたらしい。

「吉井春香です。春香で大丈夫ですよ学園長先生」

「そんじや春香。アンタはいつからソイツのもう一つの人格になつたんだい？」

「明久が観察処分者になつた日の夜に目覚めました」

「そんでそれからずっとそのガキと一緒に居たのかい？」

「体は一つしかないの。でも性別を入れ代わることも可能ですよ？」

「（明久。身体交換するから用意はいい？）」

『（OKだよ春姉）』

「『身体交換』」

二人が言葉を紡ぐと同時に明久を中心に小さな魔方陣が発生し、やがて暖かい光が明久を包み込んで姿が見えなくなつた。

そして光があさまたた時。そこにいたのは明久ではなく、文月学園の女子制服を身に纏い、髪は胸まで伸びたストレート、それでどこか明久に似た面影のある女子生徒がそこに立っていた。

そしてその光景を報告書を届けようと扉を開けた人物が目の当たりにしたが、すぐに扉を閉めた為に誰も気付くことは無かつた。

そしてこの時に明久にとつて大きな「改变」が始まっていた。

第八問（説明と邂逅）（後書き）

果たして変身場面を見てしまった人とは？

そして「改变」とは一体？

ご意見、ご感想をお待ちしております。

第九問（認知）（前書き）

バカテスト

保健体育（保健分野）

次の四大公害と発生した都道府県を正しく組み合わせなさい。

A・新潟県 B・富山県
C・三重県 D・熊本県

- 1 .イタイイタイ病
- 2 .四日市ぜんそく
- 3 .水俣病
- 4 .第二水俣病

姫路瑞希の答え

A—4、B—1、C—2、D—3

教師のコメント

正解です。いずれも戦後の高度経済成長期に発生しました。国の対策が遅れた為に現在でも苦しんでいる人がいます。

吉井明久の答え

A—I—3、B—I—1、C—I—2、D—I—4

教師のコメント

惜しい間違いです。最初に熊本県で発生し、次に新潟県でも熊本県同じ原因で発生したので新潟県は一番田です。

土屋康太の答え

A—I—2、B—I—3、C—I—4、D—I—1

教師のコメント

性以外の分野の勉強もやりましょう。

第九問（認知）

「ほおう。じりやす、じー。田の前で今起じつてんのに到底信じられ
ないねえ」

学園長は田の前で今起きた出来事を物珍しい様子で率直な感想を手短に述べた。

「で？　お前さんはこれからまー一体どうするつもつさね？」

「私は明久が観察処分者になつたから今じつして此處に居るこ
とが出来ています。だから、明久に幸せが訪れるように力を貸して
いこひつと思います」

「そうかい。それじゃ頑張るんだね。すまなかつたねこん

な」と言わして

「大丈夫ですよ学園長先生。それと何か手伝えることはありますか？」

「それは一体どういうことだい？ 主語が抜けてちゃよく分からな
いよ」

「私は試合戦争システムの一部とも言い換えられる存在です。です
からシステム関連に不具合があれば不思議とわかつてしまつので何
かと役立つと思いますよ」

春香の提案。これが後々の文月学園のペンチを回避出来た理由とな
る。

『（春姉）』

「（何？ 明久）」

『（システムの不具合なんて本当に分かるの？ 僕には全然分から
ないんだけど ）』

「（明久は純粹な人間でしょ？ だから分からないのよ。私はさつ
きも言つたけど私は試験召喚システムの一部だからね）」

『（そうなの？）』

「（そうよ！ だから落ち込まなくとも大丈夫）」

明久は内心で少し落ち込んでいた。約半年も一緒にいたのに全然氣
付かなかつたからだ。

だけど春香には全てお見通し

だから明久には落ち度は無いと言つてしまつかりフォローしていた。

すると学園長は思案顔で少し考えると、

「丁度いい機会さね。 それなら少しばかり診てもらいたいモノがあるんだか大丈夫かい？」

そう言って学園長は机の引き出しから異なる二つの腕輪を取り出し、春香（明久）に見えるように机に置いた。

それが「改変」の一歩となるとは誰も知りず。

第九問（認知）（後書き）

ご意見、ご感想お待ちしております。

第十問（指摘）（前書き）

学年末考査前最後の更新です。

今回はバカテストはありませんが、次回に実際の試験問題を出してみよつと 思います。

第十問（指摘）

「これは一体何ですか？」

学園長が取出したモノ。

それは戦争時に使用する科目の点数が400点（総合科目は400点）を超えている場合のみ召喚獣に付くされる「腕輪」だった。

しかし、今日の前にある腕輪は召喚獣が付けるには不釣り合いな大きさだった。

「見ての通り腕輪だよ。但し、これは召喚獣じゃなくて召喚する人間が着けるタイプのモノだけどね」

「それでこの二つの腕輪は何という名前があるんですか？」

「それは『白金の腕輪』と言つてね。片方は教師の承認無しで召喚フィールドを形成出来て、もう一方は持ち点を分割して一体の召喚獣を同時召喚出来る代物さね」

春香はしばらく無言で二つの腕輪を取り、異常がないか確かめていたが。

『
無理があるよ』

それは【観察処分者】である明久だからこそ分かる問題点だった。

「（明久？　一体どうしたのよ？）」

『春姉。召喚フィールドを形成出来る方はみんな使えるけど、もう一方は無理があるよ』

（春香 S. i. D. e.）

『（春姉。召喚フィールドを形成出来る方はみんな使えるけど、もう一方は無理があるよ）』

まさか明久から意見が出るとは思わなかつたわ。でも一体何処に無理があるのかしら？

そうだ

「学園長先生。少しよろしいでしょうか？」

「なんだい？まさか問題点でも見つかつたのかい？」

「いえ。まだ見つかつてませんが明久の方が何か言つたがつていてる
ので一回戻つてみていいですか？」

『春姉！？　いきなり何言つてゐるのさー…？』

「（いいからー、ほりひ問題点を言つて見なさいー。）」

自分に自信を持たせるのに丁度いい機会になるわね

頑張れ明久

（春香Side End）

「ほおう。まさか吉井明久から出でてくるとは思わなかつたよ。
良いだろう、戻つてみな」

「（明久。いくわよ？）」

『分かつたよ』

「『心身交換』」

再び春香の周りに魔方陣が発生して春香の姿が光により見えなくなり、光が収まつた中心には男子の制服に身を包んだ明久が覚悟を決めた目で立つていた。

「それで？ お前さんが言いたい」とはなんだい？ 言つてみなれー

「 無理があります」

「 無理とせざりつ」とだい？ 説明を求めるよ

「 召喚獣を一體同時召喚出来る方の腕輪なんですが、召喚獣の操作は一体だけでも困難で、ましてや一體同時では逆に不便にしかなりません」

「 どうしてそんなことが言い切れるんだい？」

「それは僕が【観察処分者】になつたからです」

「。」

学園長は一言も喋らず、田配せ一つで続きを促す。

「観察処分者になる前にやつた【試験召喚実習】では僕もみんなと同じで簡単な動きすら苦労しました。だけど、観察処分者になつて僕にフィードバックが付与されてからは格段に良くなりました」

「だから普通の生徒には複雑過ぎて無理があるって言つのかい？」

「その通りなんです。学園長先生」

すると学園長はさつきとは違ひ引き出しがから図面と書類を取り出す
と、それを持って部屋の片隅に置かれた機械の前に立ち

「まあか、そんな所に盲点があつたとはね

」

そつなくその機械を作動させた。

ピー ガガガガガガ

。

その機械から出る音に一人は混乱した。

学園長が作動させた機械。

それはシュレッダーで音はその作動音だつた。春香はとっさに【精神交換】を唱えて明久と入れ代わり、学園長に止めるように言おうとしたが遅かった。

書類は細かく裁断され細長い短冊状の紙の山となり、シュレッダーの端に集まっていた。

「学園長先生！？ 一体何をしてるんですかーーー？」

すると学園長は春香達に向かい合つて、その重い口を開けた。

「これで良いんだよ。元々腕輪は自分や味方が有利になる為のモノだ。それなのに扱いにくくなつたら腕輪の意味が無くなるさね」

そう言つた学園長は何処か吹つ切れたよつに問いかけた。

「しかし教師陣に試運転してもらつた時には問題なく使用出来てた
んだがね」

「学園長先生？ 今更ですが教師の召喚獣つて観察処分者の召喚獣
とほとんど同じですよね？」

「忘れてたさね

」

そう。元々明久が観察処分者になる前までは教師が自らの召喚獣を
使って雑用をこなしていたので、実は言い換えれば教師も【観察処
分者】と同じ待遇であることになるのだった。

第1-1問（戦争にむけて）

「気を取り直して春香に意見を聞きたいからまた戻つてくれないかい？」

「今は私（春香）が表に出でこますが」

「だったら早く体も替わつとくれ。分かってはいてもややこしくなる」

「ハーイ」

「『身体交換』」

「あとで、気を取り直して聞くがもう片方のヤツはどうだい？」

そのあとも春香と学園長の腕輪に関する討論が行われた。明久は最

初は何とか理解していたが次第に理解と思考が追い付かなくなり、討論が終わる頃には春香と交代することも出来なくなつていった……。

その為学園長の車に乗せてもらつて帰路についたが、幸いにも文月学園の関係者には誰にも見つかる事無く家に帰り着くことが出来た。

ちなみに明久は翌日の朝まで起きることは無かつたという。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

数日後。

場所はFクラス教室。

ワイワイガヤガヤと賑やかに休憩中の生徒達の前に一人の赤毛の男子生徒が教壇に立ち、クラスに響くよつに大きな声で発言した。

「みんな聞いてくれ！F組代表として提案する！俺達F組はA組に試験召喚戦争を仕掛けよつと思つ……」

そして次の言葉で教室は騒然となつた。

「初戦は明日の午後一・まずは小手調べに【D組】を徹底的に叩き潰す！！」

《ざわつーっ》

「早過ぎだ！　俺達は自分で言つて悲しいが学力最低クラスなんだぞーー！」

「それに小手調べなら【E組】で十分だろーー？」

「これ以上の酷い設備にはなりたくないーー！」

しかし雄二はそれらの声を一先ず静かに止めると、教室を見渡した。そして続きを述べ始めた。

それは試験召喚戦争を【A P Gゲーム】に、成績を【能力値】に見立ててクラスの学習意欲を向上させるものだった。

実は姫路以外のFクラスの生徒は単科目ではかなり点数の良い生徒が多く、人によってはAクラスを軽く凌駕する点数を持つ者も存在していた。

では何故彼等はFクラスにいるのか？

それは得意科目以外で【赤点】と呼ばれる点数が低い科目が多いからだつた。

では何故その科目で【赤点】になるような低い点を取つてしまつのか？

それはその科目の勉強にやりがいを見出だせないからだ。

ならばそれを見つけてやればいいだけのことだ。

かくして、文翔学園の歴史の中で後に伝説となる【最も学習意欲の高かつたFクラス】が、今ここに誕生した！

そう、彼等は【試験召喚戦争】と言つ名のゲームを【最大限に楽しむ】為に、そして苦手科目と言つ名の【弱点】を克服する為に、これからひたすら勉学を積むことになるのだった。

雄一の扇動演説により、学習意欲と戦意が大幅に向上したFクラスではDクラスへの使者の選定に入つた。

「明久。Fクラス大使としてD組に宣戦布告をしてこい！」

「え？ 僕？」 普通下位クラスからの使者って酷い目にあうよ

ね？」

「そんなもんは映画や小説の中の話だ。（F組にとつて）大事な大使に失礼なことするわけ無いだろう？」

「でも」

決めかねる明久に雄一は内心での笑いを隠し、追加で一言言った。

「明久。これはお前にしか出来ない重要な任務だ」

「分かったよ。それじゃ行つて来るね」

「そう言うと明久は教室を出てロクラスのある新校舎に向かつていたが」。

「（絶対リンクになるよ。あの雄一が僕を指名した時はうるくな事が
あつた記憶が無いもん）」

雄一の策略は明久にあつさり看破されていた。それは去年の経験が
身の危機を救つた結果となつていた。

「（ナビゲーションかな？　このままバカ正直に行くのは絶対に嫌
だし。。。春姉～。春姉はビッグしたら良いと思うかな？）」

『（成長しておらるわね　）じゃあヒントをあげるから自分で考え
てみなれこ』

「（ヒント～）」

『ヒントは《職員室》よ。それじゃ頑張つてね』

明久は取り敢えずFクラスとロクラスの中間にあるトイレに入つて

少しの間考えてみた。

「（職員室？ 職員室つて先生がいる所でしょ？ 今は殆どの先生が授業中のはずなんだけど。あつ）分かつたよ春姉！」

『ううと明久！瓶に出来ちゃつたるわよー！？』

明久は慌てて口をふたせ、トイレから出て廊下を見渡した。

「良かった。幸いにも誰にも聞かれてないみたい」

『氣をつけなさいよ？ 私のことを探しているのは学園長先生しかいないんだからね？』

「（はあーい）」

明久は春香の注意を受けると職員室に向かう為に階段を降りて行った。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

一方此方は明久が出てからしばらくたつたFクラスの教室。

「時に雄一よ」

「なんだ秀吉?」

「先程の明久との会話の内容じゃが、ホントに下位クラスからの使者は酷い目には合わぬのかの?」

「そんなもん嘘に決まってるだろ」

即答だった。

「お主！明久を騙しあつたな！？」

「何言つてんだ秀吉？」

秀吉の抗議に雄一はまも然とでもこうような口調できり返す。

「俺の話をあつさつと信じたあいつが悪いだよ」「やつぱりハメようとしてたんだね？」

「「「」」

いきなりの声に一人が教室の入口に視線をやると、そこには制服も乱れずに傷一つ負っていない明久の姿が立っていた。

「なんだ明久、怖じ氣づいて戻つて来ちまつたか？」

「何言つてゐるの？ ちゃんと明日の午後開戦だつて伝えたよ

「それにしちゃ あ制服が乱れてねーじゃねえか

「なんで使者が制服乱れて帰つてこなきやいけないのさ？ とにかく、回復試験に備えて勉強したいからもう帰るね」

そう言つて明久は帰つて行つたが、姿が見えなくなつた途端に去年の明久を知る数人が集まつた。

「おい 、わざわざいつ何で言つてやがつた？」

「た、確か『回復試験に備えて勉強したい』とか言つておつた気がするのじゃが 」

「信じられないけどウチにもそつ聞こえたわ

「わ、私もです　　」

「俺も」

明久の言論についての討論が行われている最中、

「吉井がそうするなら俺も帰つて勉強させてもらひからな」

そつと云つて帰宅の準備をし始めたのは須川だった。

『須川（君）！？』

五人は須川の行動に驚くが周りでは須川に同調するように帰り支度をし始めた。

「吉井は【観察処分者】の利点で少ない点数でも相手を倒せるが俺達には無理だからな。だったら点数上げて死ぬリスクを減らさないといけないからな」

「せっかく終わりの無い試験召喚戦争を手に入れたんだ。やらなきや損だろ？」

「卒業したら一度と出来ないんだ。だったら今のうちに楽しんどかないとな！」

雄一の演説と明久の行動の相乗効果はクラスメイトに良い方面に影響を及ぼし、後の戦争において優位に立てる礎となつた。

第1-1問（戦争にむけて）（後書き）

まだテスト結果が届いてないのでバカテストは見合せました。

そしていよいよ次回より2組相手に試験召喚戦争を開始します！

お楽しみに！

美春はどうしよう（汗）

第1-2問（ロクラス戦）（前書き）

バカテスト

世界史

正統カリフ時代とウマイヤ朝時代はアラブ人が特権的支配層を形成していた為に何帝国の時代とされていたのか答えなさい。

姫路瑞希、

吉井明久の答え

『アラブ帝国』

教師のコメント

正解です。吉井君は大変良く出来ました。

木下秀吉、
土屋康太の答え

『イスラーム帝国』

教師のコメント

惜しいです。イスラーム帝国はアラブ帝国の後にムスリム（イスラム教徒）の平等とアラブ人の特権の廃止によって成立しました。ただ一人以外にも最近のF組は惜しい解答をした人が多いのでこれらに期待しています。

第1-2問（ロクラス戦）

（明久Side）

「吉井！渡り廊下で木下達が戦闘状態になつたわよ！」

島田さんがそう言って教室に入ってきた。今回僕の役目は島田さんや他に数人を率いる中堅部隊の隊長で、さつきまでは回復試験を受けていた。

「分かつた！中堅部隊全員行くよー！」

《了解ッ！—》

そして僕は島田さんや須川君を含む11人を率いて戦場へと向かって行つた……。

「くそっ！次から次へとキリがない！！」

Dクラスの生徒は完全に油断しきっていた。自分達よりも2ランク下、しかも最下位のFクラス相手だから大したことないと思つていた。

しかし試召戦争という【ゲーム】を本気で攻略しようとしているFクラスは戦死しかけたら他の生徒がカバーして互いに戦死しないようにしていた為に戦死することなく、逆に次々と攻撃を受け続けたDクラスの召喚獣が戦死していった。

そして15人程が展開していたDクラスの前衛部隊は、既に半分以下の人になっていた。

「塙本！これ以上は無理だ！一時撤退を！？」

「戦闘中によそ見をするでないわ！」

【教科・数学】

F組・木下秀吉 69点

VS

D組・曽根崎達也 27点

「しまつー！？」

振り向いた時、曽根崎の召喚獣は秀吉の薙刀の一撃をくらい、消滅した。

【教科・数学】

F組・木下秀吉 56点

VS

D組・曽根崎達也 0点

「さあ戦死者は補習室に移動しろーーー！」

そこへ現れたのは鉄人。彼は逃げよひとする曾根崎を捕まえ補習室まで担いで行つた。

「（ふむ。何とか勝てたが正直もつ召喚獣はヘロヘロじやぞい）」

「秀吉つ！大丈夫！？」

そこへ明久達の部隊が合流しロクラス勢はこの隙に体勢を立て直す為に撤退していった。

「明久！来ててくれたのじやな！」

「うん！もつ大丈夫だよ。それより状況は！？」

「つむ。皆戦死はしどらんが流石にこれ以上の戦闘は不可能じやな。点数もそつじやが召喚獣も疲弊しきつとる」

「分かつた。前衛部隊は中堅部隊と交代して回復試験を！ その後

は雄一の指示に従つて！ 中堅部隊は安全を確保しつつ前進！「

『了解！』

戦局は完全にFクラスの手中に収まつた。そしてDクラスは雄一率いる本隊に回復試験を終えた前衛部隊の波状攻撃により、代表が討ち取られ敗北した。

余談になるがDクラスの清水美春が美波に「お姉えさまあ～～～！」
「！！！」と飛び付こうとしたが

「清水！召喚獣を使わないと失格だぞ！～！」

という鉄人。西村教諭の警告を無視した為に、召喚することなく補習室に連行されて行つた。

その時に彼女が「これで終わったと思わないで下さいまし～～！」
「」と言い残し、美波の苦惱はこれからも続くのだった。

それはさておき、Fクラスの勝利に終わったDクラス戦の戦後交渉
はDクラスの教室で行われることになった。

「（やつたよ春姉！）これで少なくともE組の教壇とまづばりだよ
（）」

『それはどうかしらね？』

「（春姉どうしたの？）」

『坂本君のことだから恐らく一重二重に張り巡らせた計画でもある
んじやないかしら？ それに今設備を交換してもE組に狙い撃ちさ
れるだけよ。 回復試験をする時間すら『えず』にね』

その言葉を聞いた明久はすぐ不安になり雄一がどう処理するのか気になつて仕方がなかつた。

「ルールに従つて教室は明け渡すよ。ただ今日はもう遅いから明日にしてもいいかい？」

負けたDクラスの代表は覚悟を決めた。これから試験召喚戦争の行使出来る権限が復活するまでの三ヶ月の間、彼は敗戦の【責任】を負わねばならないからだ。

そして三ヶ月もの間、耐えねばならないからだ。クラスメイトからの厳しい恨みの込められた視線に……。

「いや、その必要は無い」

しかし彼の覚悟は不要だった。

「どうしてだい？」

「D組の設備を奪つつもりは無いからだ」

その発言にFクラスの生徒から困惑の声が多くあつたが、雄一はそれを宥めて説明した。

「忘れたのか？俺達の狙いはA組の設備だ。だからD組の設備を奪う気はない」

「（春姉。もしかしていつなること分かつてたの？）

『確証は無かつたけど予想はしていたわ。ただここまで当たるとほ

思つてなかつたけじね

「（でも春姉はやつぱつすいこよ）」

『（あらがといつでも、壊めても【課題】は減らなにわよへ。）』

「（えへへー。）」

『（ほへらー。そんなに落ち込まなこで早く帰るわよ。もつ戦後交渉も終わつたみたいだし。）』

「（あひ、本當だ。）」

二人が話してゐる最中に交渉は終わり、Dクラスと【一学期中におけるF組への交戦権の放棄】という条件で和平交渉が成立した。

～その頃、ヒカルの園の一室にて～

「フフフ　　、これでよし。もひーの学園に未来は無い」

その部屋の主、竹原教頭は他人が見たらドン引きするような不気味な笑みを浮かべて目の前のパソコン画面を見つめていた。

「生徒にもう一つの人格形成。そんなことなど決してあつてはならないことだ。もしこのことが世間に知られれば、人権団体からのバッシングと批判は避けられないだろう。更に清涼祭のイベントの賞品となる新たな腕輪の不具合。推薦をエサにして【あいつら】に腕輪をとらせ、大勢の目の前で暴走させてやればお仕舞いだ！」

数日前、学園長室に入ろうとして春香のことを盗み聞きしたのは教頭だった。

学園を転覆させるネタを求めていた彼は、この出来事は格好の攻撃材料になると考えて情報を独自に集めていた。

だが、彼の目論みは予想しえない事態によって崩壊してしまうとは誰一人、本人すらも知ることは決して無かつた。

第1-2問（ロクラス戦）（後書き）

1ヶ月も未更新ですみませんでした。

ただ今年作者は高二で進学がかかつてるので更新が不定期になりますが宜しくお願いします。

さて、いきなりの展開で申し訳ありません！

戦闘シーンはこれからも少ないですが、よければこれからもお付き合いで下さい。

最後に、今回のバカテストは作者の高校の学年末考査に実際に出題されました。

第1-3問（邂逅）（前書き）

バカテスト

物理

次の文章の（ ）に正しい言葉を入れなさい。

『光は波であつて（ ）である』

姫路瑞希の答え

『光は波であつて（粒子）である』

教師のコメント

よくできました。

吉井明久の答え

『光は波であつて（希望の象徴）である』

教師のコメント

問題の答えとしては不正解で点はあげられませんが、この解答は嫌いではありません。

第1-3問（邂逅）

△クラス戦の翌日。

「おまはよ！」

明久はそう言って△クラスの教室に入った。設備の交換は行われなかつたので設備は卓袱台とその他一式のままだ。

「おまはよ！ じや、 明久」

そう言って返事を返したのは、何故かポーネテールにしている秀吉であった。

「 。」「 。

「明久？ ワシの顔に何かつことるのか？」

「秀吉 。 主張と行動が矛盾してるなと思つるのは僕だけかな

？

「それは一体なぜいつにじめか？」

「今、君は、正直言って女の子にしか見えないよ。」

「何、じゅうとー。」

秀吉は、数秒程無言だったが脳内で処理が片付いた途端に驚愕の声を上げた。

『（おひみつ）どうやら完全に覚えていたようだ』

春香は気付いただけでも良かつたと思ったが、かと言つてどうすれば周りから普通に男子と認識されるのかといつこれと言つたアイデアが思いつかず、結局本人の努力次第ということになつた。

そして時間は流れて現在は四時限目の終了のチャイムが鳴り、昼食の時間を迎えた。

「さて飯とするか……」

「雄一は学食なの?」

「おう! 今日は親子丢に天津飯にオムライスにラーメンってトコか!!」

「えつと 雄一？ それは炭水化物ばかりな所なのか、やたら玉子料理ばかりな所なのか、それかその量の多さなのか、一体どちら突っ込めばいいのかな？」

明久はどう答えたらいいのか分からなかつたからそう答えるしかなかつた。

決して、どれを選んでもたいして変わらないことは絶対気にしてはいけないことである。

ちなみに健康上、玉子は1日に一個が望ましいらしいが雄一の場合、昼食だけで確実に十個は越えていくだろう。

「んで明久はどうなんだ？」

「僕はお弁当持ってきてるから屋上で食べるよ

「そうか？んじゃ後でな」

結局、この日は明久と秀吉以外は弁当を持参していなかつたので急いで学食に向かつた。そして残つた一人が屋上に移動すると、既に三人程先客が来ていた。

「あ、り秀吉じゃない？」

一人目は秀吉の双子の姉で△クラスに所属している木下優子だった。

「へーえ、あのが優子の弟君なんだ？ ホントにそっくりなんだね」

そう言つたのは工藤愛子。一年の終わりに転入していたボーカルシユな女子生徒だ。

そしてもう一人は長くて美しい黒髪が特徴で一年生学年主席の女の子、霧島翔子だった。

「秀吉のお姉さんに霧島さんに

えと

」「

秀吉の姉である優子と、学年主席であると同時に男子はおろか同姓である女子さえも見惚れてしまう美しさの翔子の一人は知っていたが、愛子に関しては全くの初対面で名前を知らない為に明久は言い淀んでしまった。

「あ～、キミ達は確か初対面だったはずだよね？ ボクは工藤愛子。去年の終わり頃に文月に転校してきたんだ。よろしくね！」

「あつ
はい！ 僕はF組の吉井明久です。よろしく、工藤さん」

「F組？ それって昨日試合戦争を仕掛けて、勝利したあのF組？」

「
そうだけど？」

「しかも設備交換の権利を放棄したって聞いたけどそれってホント

なの?』

『(春姉、じうつよひへ何か言つてはこけない) ひさびさに話題が
氣がしきもつんだけど』

『()』

『仕方ないわね。ちよつと変わつなせこ』

『(春姉?)』

『明久の場合、自分で直覚があるだナドも十分成長してゐるナビ、ま
だ足りないモノがあるのよ』

『(足りないモノ?)』

『やつよー。だからそんなんが変わつたから。怪しまれて詰づかれるわ
よへ。』

「(せーこ)」

(「『精神交換』」)

「吉井君?」

「(い)めん! 藤さん。そのことは雄一の頭の中でしか分からないんだ」

「どうして? なの? 優子の弟君?」

「ワシに聞かれても分からぬぞ。まあ設備交換をしてないというのは事実じゃがの、それとワシのことは秀吉で良い。その方が言いやすいじゃん?」

「せうだね。じゃあ改めてようじくねー。」

「うるさいやつ、よくしゃべ頼むのじや」

「

？」

その後は普通に世間話などをしている内に昼休みが終了してそれぞれの教室に戻ったのだが、一人の少女は明久の様子に違和感を感じて午後の授業に集中することが出来なかつた。

第1-3問（邂逅）（後書き）

本当にかなり遅くなつてしまつました（トート）

今日は、原作ではまだ会わない五人を会わせてみました。

それと『キャラが真面目過ぎ』という指摘を受けて、次からは少し暴れさせてみようかなと思います。

ちゅうど根本を叩きのめす材料が無かつたので 。

次回

『人間はやつぱり急には変われないのね』 b ゆ春香

鬱憤ばらじは気分良ぐー！

第1-4問（怒りへの序章）（前書き）

今回バカテストはおやすみします。

それとカップリングですが他にはない少し特殊パターンでやつてみようと思つますので今後にご期待下さいませ。

第14問（怒りへの序章）

（翌日）

「～～～と言つて、俺達F組の次の目標はB組の連中共だ！異存はないな！？」

【オオ――――――!】

「お、おおー」

無理しなくてもいいのに。と明久と春香は思ひながらも、クラスの雰囲気に圧されたように小さく拳を挙げた姫路を見守りつつ、作戦会議は進んでいった。

そして今回も相手クラスへの使者に明久が選ばれ、明久は雄一から必要な情報（開戦日時など）を貰い、Bクラスへ向かつた。

「だけどB組ってなんとなくFやE組よりもまとまりが無いと思つのは気のせいなのかな？」

実はこの数日前に体育館で行われた新任式で一年生6クラスの内、一番集まるのが遅かつたのがBクラスだった。

更に明久は知らないことなのだが、Bクラスは上から一番目に優秀なクラスながら遅刻や無断欠席、早退をする生徒が多く、教師達の間で問題視されていた。

しかも、そのような生徒の殆どは昨年度は普通に出席していたので教師や春香は容易に原因は分かつていた。

「（春姉、B組の代表って誰だか分かるかな？）」

『（ 言つて大丈夫かしら？ ） B の代表は「あの」根本恭一よ』

「 本当に？」

『 本当よ（キッパリ）』

明久は「それじゃ無理ないよ」と思わずそう口に出してしまった。

根本恭一。

この名前を知らない者は文月学園にはいない。良い意味であれば何の問題も無いのだが、彼は【完全に逆】の意味で有名だった。

曰く、ケンカに刃物は標準装備である。

曰く、球技大会で相手チームに一服もつた。

曰く、カソニング常習犯。

曰く、相手の弱みを握って服従させる。

他にもいろいろあるが特に必要ないので割愛。

「絶対いやな予感しかしないんだけど

」

『（だったら）ねえ明久。ちょっと変わってめにいかしりっ?』

「どうしたの?」

『いいからいいから。上手くいったらB組とやらなくてすむから』

そう言って明久と精神を交換した春香は来た道を引き返してFクラ

スへと戻つて行つた

。

第14問（怒りへの序章）（後書き）

次回、怒りと不満の導火線が火を放つ

。

第1-5問「爆発と変革」（前書き）

FクラスはやっぱFクラスなんですね。

第1-5問「爆発と変革」

今日は敢えて結論から言わせてもらおう。

Bクラスとの試験召喚戦争はFクラスの【一応】の勝利という形で終結した。

なぜ【一応】という言葉を頭に付けたかといつて、それはこれから説明するのでそれをもって理解していただきたい。

時間は春香が明久と精神を交換して明久の体でFクラスの教室に戻った時までさかのぼることになる。

（Bクラスの教室）

「雄一、雄一、ちょっと言つて良いかな？」

「なんだ？ 一応言つとくが代わりの人間は送れないからな」

「それじゃなくてB組の代表についてなんだけど」

「　　言つてみろ」

「B組の代表つて【あの】根本みたいだよ」

「本当か！？ それは知らなかつたから助かつたぞ」

どうやら雄一はBクラスの代表が誰なのかは知らなかつたらしい。なので明久からもたらされたこの情報により直ぐ様計画を見直そうとしたが、同時にとある違和感を感じていた。

（こいつは本当に明久なのか？　こいつのバカ具合ならこんな機転
が利くとは思えねえし、それに声がいつもよりハッキリしてる気が
するんだが　　）

だがその明久について考へてる内にその当人が衝撃的な事実を言い
放つた。

「それと根本には彼女がいるんだって」

（（（（ブチッ！））））

『吉井！ その話は誠の事実であるか……？』

「ふえ……？」

「だから私の話は眞実であるかと聞いておるのだ……！」

「う、うん本当だよ。根本とじとの彼女が密会しているのを見たから

」

『どうで見た……？』

「B組前の廊下の影」

『あんな薄汚い最低毒キノコ雲野郎に彼女なんて贅沢なんぞ言語道
断……！』

「行くぞ同志達よ！ あのクソ野郎に正義の鉄槌を神に代わり我ら
が執行するのだあ……！」

『うおオオー……！』

気づけばFクラスの大半の男子（明久、雄一、秀吉、康太、須川と一部以外）

が怒りの熱気を漂よわせて持てる限りの武装でBクラスへと突撃した後だった。

「不安だ」

教室には雄一の言葉が寂しく響くだけだった。

だが、彼の不安は直ぐに無用となつた。

そして、根本恭一は神から完全に見放された。

Bクラスに突撃したFクラス怒りの軍団約30名は、代表である根本に不満を持つBクラス生徒の支持を直ぐ様獲得してBクラスとの

間で『無期限相互不可侵条約』と『相互協力条約』の締結に成功。

更にBクラスは根本が負傷による入院の為に次席が代表に臨時で就任してからは欠席率や早退率が大幅に改善し、教師もその次席を正式にBクラスの代表に任命した。更に根本の彼女もこれをきっかけに彼を見捨てて破局を通告した。

これにより、学校での立場が完全に失われた根本は次第に学校に姿を見せなくなり、逃げるように文月学園から転校した。

そして『相互協力条約』によりBクラスはFクラスに勉強を教えることを、FクラスはBクラスが他クラスに戦争を仕掛ける時に支援することを確約した。

Fクラスに残る敵はこれでAクラスただ一つとなつた。

第1-5問 「爆発と変革」（後書き）

【平和的】に根本を成敗致しました。

これにより根本恭一(はま)の作品から退場せざりこみました。

感想お待ちしております。

第1-6問（宣戦布告）（前書き）

バカテストは不定期にさせてもらいます。

そして今回はAクラスに宣戦布告をします。

第1-6問（宣戦布告）

「一騎討ち戦？」

「ああ、俺達F組は一騎討けの五回勝負でA組に試験召喚戦争を申し込む」

現在。明久や雄二や一部のFクラス生徒は宣戦布告をするべくAクラスに赴いていた。

「断るね。そんな特殊な設定を受け入れることは到底出来ない」

そして対するAクラスで対応をしていたのは学年次席の久保利光だった。

「それなら

雄一はこの案件が拒否された時にと考えていた作戦を実行に移すことにした。

「須川！ B組に伝令！ 内容は『交互協力条約に基づき、午後よりA組に模擬試験召喚戦争を開始願いたい』だ！」

「わかった！」

「そして、康太は残る一年の全クラスにこの情報を流せ！ 恐らくD組は参加してくれるだろう。」

「承知した」

「そして俺達F組は本日放課後にA組に試験召喚戦争を申し込む！ 勿論これは通常の形式でだ！」

まるで計算されてたかのように手際よく進めていくFクラスにAクラスは騒然とした。無理もないかもしれない。何しろ下手したら全部のクラスと半日で試験召喚戦争をしなければならなくなるのだから。

「待て！ わかった。そちらの条件で受けさせてもらおう」

流石に全部のクラスとじつてからではまずいこと久保は先程の言葉を撤回した。

「わかった。なら時間は今日午後からでいいか？」

「わかった」

「須川、康太！ さつきの指示は取り消しだ。みんな教室にもどるぞ」

そしてついに最低クラス対最高クラスの勝負が幕を開ける。.

「（春姉、今回僕何もしてないんだけど
これでいいのかな?）

「

『いいんじゃない？ それを言つたら私も何もしてないわよ？』

「（いや春姉は前回の策略すこしかつたよ？）

『ありがとう』

』

第1-6問（宣戦布告）（後書き）

短くてすみませんです。

第17問（Aクラス戦？）（前書き）

Aクラス戦、開始！

第17問（Aクラス戦？）

「それではこれよりA組とF組による試験召喚戦争を開始します」

午後、場所はAクラスの教室で一騎討ちの五回勝負という特殊条件でこの前代未聞の勝負が始まつた。

「ではまず先鋒戦を行います。両組とも代表者は前に出て下さい」

ちなみに立会人は学年主任の高橋先生で、科目選択権は先鋒と中堅はAクラスに。残る次鋒、副将、大将戦はFクラスが権利を得た。

「それじゃアタシがまずは相手してあげるわ。高橋先生、科目は数学でお願いします」

「数学ならウチが得意だからウチが出るわね」

「よしわかった。なら行ってこい島田。落ち着いていけよ?」

「ダンケ（ありがとう）」

そう言って雄一に笑顔を向けた時、美波は一瞬身体を氷の槍で貫かれたような感覚に襲われた。

「それでは先鋒戦、数学勝負を承認します！」

「「試獣召喚……」」

そして召喚フィールドが展開され一人が召喚の呪文を唱えた。

「数学だけならB組にだって引けを取らないんだからー！」

「あらそつなの？　でも」

【教科・数学】

F組・島田美波	221点
VS	
A組・木下優子	355点

「アタシはA組だけどね」

そう言い終わる前に優子の召喚獣のランスが美波の召喚獣を真っ二つに切り裂き、ここに先鋒戦が終結しA組の勝利となつた。

「ゴメン。負けちゃった」

「大丈夫だ。まだ初戦だしなんとかなる。よくやつたぞ、島田」

「あ、ありがとう」

雄二の労いに美波は顔を赤らめてそそぐとEクラス陣営に戻つて
いった。

「では次、次鋒戦を行います。両組の代表者は前に出て下さい」

第17問（Aクラス戦？）（後書き）

まさかの雄一×美波かも？

第1~8問（Aクラス戦？）（前書き）

バカテストは、手違いで一回も消してしまったので次回に掲載します。

第1-8問（Aクラス戦？）

- ・Aクラス vs Fクラス
- ・五回勝負 次鋒戦

- ・教科選択権はFクラス

「俺がいくが構わないか？」

「康太！ 科目選択権をしつかり活用しろよー！」

「わかつてゐる。高橋先生、科目は保健体育で頼みます」

「保健体育ならA組からはボクが出るよ」

そう言つて前に出て来たのは、色の薄い髪のショートカットヘアのボーイッシュな雰囲気で明久と秀吉は見覚えがあつた。

「「工藤」」

その呼び掛けに愛子は^(反応)一人に笑顔を向ける。

「ヤッホー！　久しぶりだね。元気だった？」

「おかげさまで」

「右に回じじや」

明久と秀吉が工藤と会釈を交わしてゐる時。今度はFクラス陣営から明久に向けて一対の視線の槍が放射されてゐた。しかし当の明久は美波みたいにそれに気付くことは無く、むしろ無意識に受け流していた。

「では次鋒戦、保健体育勝負を承認します！」

「試験召喚」

「試験召喚」

試験召喚

【教科・保健体育】

A組・工藤愛子	446点
VS	
F組・土屋康太	399点

「なつ何だあの点数は！？」

「A組上位だとここのまで高いのか！？」

「いや土屋の奴も結構点数良いぞ！」

「なんでA組並の点数の奴が姫路さん以外にF組にいるんだよ！？」

A、Fの両クラス陣営から驚愕の声があがつた。それはFクラスは愛子の点数の高さに、Aクラスは土屋の自分達に匹敵する点数に。

「すげーな康太！」

「雄一も」の点数には驚いたようで、彼に賞賛の言葉を紡いだが

「点数が良いのはこれだけ。後はまだ全然高くない」

彼、康太はどうやら保健体育しか今まで勉強をしてなかつたらしい。

「それでも400点にあとわずかなんですごいよ。でもだからと言つて勝ちは譲らないからね！」

そう言つて愛子は召喚獣の武器である大きな斧を勢いよく康太の召喚獣に投げつけた。

「武器を放棄するなど自殺行為」

康太は斧の軌道上から召喚獣を回避させて反撃に轉じようとした。

しかし

「ゴメンね」

「……？」

その瞬間、康太の召喚獣に複数の電撃が直撃し、彼の召喚獣が消滅した。

「ボクの腕輪の効果はね、召喚獣にも一つ一つの武器を付与すること
が出来るんだよ」

そしてこの時、彼女が選んでいたのは『超電磁砲』だった。

第1-8問（Aクラス戦？）（後書き）

次からがこの作品を書き始めた理由になります。

第1-9問（△クラス戦？）（前書き）

バカテスト

家庭科

一般的に調味料で『さじすせそ』とはそれぞれどの調味料を意味するのか答えなさい。

吉井明久、坂本雄一、

土屋康太、須川亮の答え

さ 砂糖、し 塩
す 醋、せ 醤油
そ 味噌

教師のコメント

まさか男子でこんなに正解率が高いとは思いませんでした。

姫路瑞希の答え

さ 醋酸、し 硝酸
す 酢、せ 石灰
そ 味噌

教師のコメント

どうやら家庭科と化学が入り乱れてしまつたみたいですね。次からは気をつけて下さい。くれぐれも『さ』と『し』と『せ』をこのままにしておかないように！

第1-9問（Aクラス戦？）

- ・Aクラス v S-Fクラス
- ・五回勝負 中堅戦

- ・教科選択権はAクラス

まさか康太が敗れるだなんて思つてもいなかつた雄二にとつて、この状況は背水の陣と言つても過言では無かつた。

(ここで姫路を出して勝つたとしても次でアウトになつちまう。こんなんだつたら明久を捨てゴマにしてやるうなんて考えるんじやなかつたぜ)

「次は私が行きますね。高橋先生、科目は地学でお願いします！」

更にAクラスから出た少女、佐藤美穂が選んだ科目が雄一を悩ませた。

(おこおこマジかよ。更にごじめをさすなよ)

文翔学園では試験召喚戦争以外にも文科省の様々な教育改革のテスト校になっており、他にはないカリキュラムが組まれている。

その中には『理科希望分野選択制度』といつのも含まれていた。

これは一年時に化学と物理が主な内容の『理科総合A』と、生物と地学が主な内容の『理科総合B』をまず履修させる。

そして一年時からは四つある教科（化学、物理、生物、地学）から理系生徒は一つ、文系生徒は一つを選択して履修するようになつてゐる。

そして試召戦争において理科系科目は『理科』と一括りして取り扱われ、理系生徒は一科目の内のどちらかが戦争でランダムで使われる。この時、試召戦争が終結するまでは科目は変わらない。

そして文理学園では文系と理系で科目数が違つてしまい、理系生徒が不利になるのを防ぐ為に文系生徒には古典が追加される。（古典と理系のもう片方は通常の試召戦争では使用不可、使えるのは一対一の模擬試召戦争などに限定）

この制度により生徒本人が希望する理科科目を学ばせて日本の技術力を向上させようとすると狙いがある。

また余談ではあるが理系の場合一年で二つ、三年で残り二つとこうふつに四つ全てを履修することも可能である。

さて、この制度により美穂は地学を選んだ。それがなぜ雄二を悩ませるのか？

実は地学は他の三つに比べて人気が無く、全てのクラスで選んだのは十人に満たなかつた。そして文系である雄二は生物を、理系である瑞希も選んでいたのは化学と物理であり、地学は選んでなかつたのだ。

秀吉は文系で選択は雄二と同じく生物。美波も文系で選択は地学であつたが既に先鋒戦に出ており、選ぶことが出来なかつた。

「（雄二）一体どうしたんだろう？」

『多分相手の子が地学を選んだから誰を出すべきなのか迷つてゐるの

「（地学か）。それなら僕が出ようつかな？」

『いいの？』

「（）」（）で負けたら、折角頑張った意味が無くなるとおもうんだよ（）」

『それもそうね。分かったわ明久。今までの努力の結果、存分に知らしめて来なさいーーー！』

「（うんーーー）」

春香から最大の後押しを受けて、明久はクラスの皆の前に立つてこう宣言した。

「僕が行きます！！」

それは、明久の半生で最大の挑戦の幕が上がった瞬間だった

。

第1-9問（アクラス戦？）（後書き）

戦闘シーンは次回になります。苦手ですが頑張りたいと思います。

またこれから作品の展開と今までの内容から、本文を一部修正し
キーワードも改めました。

では今後ともよろしくお願ひします！

第20問（アクラス戦？）（前書き）

バカテスト

地学

太陽系における『惑星』の名前と順番を太陽から近い順に書きなさい。

吉井明久の答え

水星 金星 地球
火星 木星 土星
天王星 海王星

教師のコメント

正解です。吉井君は最近良い成績になつていつてるのでこれからも頑張ってください。

土屋康太の答え

水星 金星 地球
火星 木星 土星
天王星 海王星 冥王星

教師のコメント

かつてはこれが正解だったのですが、2006年に国際天文学連合により冥王星は惑星の分類から外されてエッジワース・カイパーベルト天体（太陽系外縁天体）の典型例とされることになったので残念ですが不正解です。

須川亮の答え

水金地火木土天海

教師のコメント

これは覚え方です。でも冥王星を書かなかつたのは良かつたです。
次までには正確に書けるように頑張ってください。

第20問（Aクラス戦？）

「僕が行きます！」

吉井君がそう言つて美穂の前に立つた時。この前一緒に昼食を食べた時に感じた違和感と似たような感覺に襲われた。

ただ今回はこの前とは違つて彼の様子に変な所はなかつたけど、その瞳には自信に満ちた輝きを宿しているようにアタシにはそう見えた。

「気をつけて美穂！　吉井君、何か隠してるわ！」

だからアタシは咄嗟に美穂にそつ警じつけい告しようとしたけれど、それは結果的に美穂を混乱させる事態になってしまった。

「えつ！？ どうしたの優子？ そんな」「それでは中堅戦。理科選択科目の地学勝負を承認します！」

高橋教諭は美穂の言葉を遮り、時間通りに中堅戦の開始を宣言した。

「えと、や、試験召喚…」

「試験召喚…」

そして二人の呪文の後、二つの魔方陣が表れ、一体の召喚獣が姿を現す。

【教科・（理科選択）地学】

A組・佐藤美穂 377点

V S

F組・吉井明久 583点

「550オーバー！？」

「何だよあの点数は！？」

「だから何でやつもからF組にこんな点数の高い奴がいやがるんだよ！？」

「俺に聞かれてもんなこと分かんねえよ！」

「つそでしょ？」

Aクラスは先程の康太といい今の明久といい、Fクラスに自分達と同等の点数を持つ者が多いことに騒然としていた。

「それじゃあ」

明久は自分の召喚獣についてる腕輪を発動させる為のキーワードを唱えた。

「来たれ（アーテアット）！」

すると明久の召喚獣のまわりに魔方陣が出現し、その姿が光の包まれて見えなくなると同時に明久自身のまわりにも魔方陣が現れた。

しかしこいつの光は召喚獣の光よりは弱く、姿が見えなくなる程度では無かつた。

「お、おい明久！ 一体どうなつてやがんだ！？」

「明久君大丈夫ですか！？」

「アキ！ 急に一体どうしたのよ！？」

「 説明要望」

「まあまあ四人とも、取り敢えずは落ち着くのじや。観察処分者で

ある明久のこと、まあ大丈夫じゃね（まさか姉上も気付いておったのか？ 後で確認することにするのじゃ）」

秀吉達の会話は明久には聞こえていなかつた。

否。音は聞えているが余りも速度が遅く、最早何を言つてゐるのかは聞き取れない状態だつた。

ついでに女子一人の明久の呼び方が変わつてゐるのも氣にしてはいけないことである。

そして光が収まつた後、召喚獣の装備は大きく変わつていた。

学ランだった服装は文月の制服に黒いローブと黒い長帽子に、そして武器は木刀から召喚獣の背丈と同じくらいの木で出来た杖を携え

ている。

『魔法使い！？』

明久を除く皆の反応はほぼ全てがこれだった。

まあ召喚獣の装備は点数が高い生徒でも近接戦闘を行う刃物や銃火器のような科学の武器が殆どで、魔法使い等のオカルト系の装備は極めて少ないので驚くのも無理は無かったと言えると思って貰いたい。

そして、周りがそんな状態で明久は召喚獣に向かって呪文唱えた。

「戒めの風矢！」

バシュウウ - - - !

途端に杖の先に光の球体が発生し、美穂の召喚獣を目がけて勢いよく襲い掛かってくる。

「キヤアッ！」

しかし命中寸前の所で何とか回避に成功し、ダメージはうけていた
かった。

ただし、

（私の武器じゃ近づかないと攻撃出来ない、でも近づいてみると攻撃されても反撃すら出来ない　　）

戦略面で美穂を八方塞がりに追い込み、戦意を喪失させていた

。

「（次で決める！）魔法の射手連弾・雷の21矢！！」

バシュウウウ――――――！

そして、明久の召喚獣から放たれた21本の雷の矢は全てとは言え
ないが15本以上は確実に命中し、美穂の召喚獣をフィールドから
消し去った。

【教科・（理科選択）地学】

A組・佐藤美穂 0点

VS

F組・吉井明久 458点

「勝者F組、吉井明久！」

内心では驚きつつもそれを決して表に出さず、高橋教諭は試合終了を告げた。

第20問（アクラス戦？）（後書き）

明久の腕輪の能力は魔法使いで魔法は『ネギま！』から引用させて貰いました。

詳しい解説は次回以降に本文で紹介したいと思いますのでご期待下さい。

第21問（Aクラス戦？）（前書き）

短いですが投稿します。

第21問（Aクラス戦？）

「勝者F組、吉井明久！」

「去れ（アベアツト）！」

高橋教諭の声と同時に明久は再び呪文を唱える。

するとまた明久と明久の召喚獣の周りが光だし、発光が終わると召喚獣は元の装備の学ランに木刀の姿となり、既に勝負は終わっていたのでその後に魔方陣と共に消滅した。

「さてと明久。どういうく「では次に副将戦を行います。両組共に代表者は前に！」つてお言葉ですが高橋先生はちつとも気にならな

いんですかーーー?』

雄一が明久に問い合わせようとして高橋教諭に遮られ、自分は明久の異常さが気にならないのかと雄一は高橋教諭を問い合わせる。

いつもなら止めに入るなり注意なりするであろう生徒も、今回は好奇心が勝つて彼を止めようとではない。

「確かに気になりますが、後から本人に聞けば良いだけです。それより次の代表者を出して下さい」

気にはなるがあくまでも業務を最優先する高橋教諭であった。

そして次の副将戦はFクラスからは瑞希が、Aクラスからは久保が出陣。

科目は初めての総合科目が選択され、400点以上も点数差がついていた為に久保が敗北。

大将戦を残して2勝2敗の互角の戦いとなり、当初は余裕の表情を見せていた一部Aクラスの生徒からはその表情が消え、焦りが見えていた。

そして残る一戦。大将戦を以てこの戦争に終止符が打たれることとなつた。

第21問（Aクラス戦？）（後書き）

活動報告においてお知らせを載せていくので、一覧下に記す。

第22問（Aクラス戦？）（前書き）

遅くなりました。

第22問更新します！

第22問（Aクラス戦？）

- ・Fクラス vs Aクラス
- ・五回勝負 大将戦

- ・科目選択権はFクラス

「それでは最後、大将戦を行います。この勝負は両組共に振り分け試験時の最高得点者が出て下さい」

「 はい」

「んじゃ、行つてくるわ」

Aクラスからは学年主席の成績を持ち、大和撫子と日本人形いう言葉が似合う黒髪の美少女。霧島翔子が。

そして我らがFクラスからは満を持して坂本雄一が、それぞれの陣當から一步を踏み出し、高橋教諭の前にて向かいあつた。

「では坂本君は対戦科目を指定して下せ」

「教科は日本史。ただし、内容は小学校6年レベルで百点満点の純粹な筆記テストだ！」

雄一が指定した対戦内容にざわめきがAクラス陣當から発生した。

無理もない。召喚獣を使用せずに普通の試験の点数による勝負をすると言つて出てきたのだから。

しかも、その試験とは高校ではなく小学校の6年生レベルといつこ

とは、集中力が切れた方が負けとなり、自分達のアドバンテージである学力だけではもしかしたら負けてしまうことになるのだ。

一方のFクラス陣営は落ち着いた雰囲気を維持していた。

これは事前にFクラスの教室にて雄一が説明を行った為にこうなることを知っていたからだ。

その際に、多少の騒動が起きかけたが秀吉の機転で何とか仲間割れを防ぐことが出来たのは決して気にしてはいけないことである。

むしろFクラスの大半の生徒が気になっていたのは、宣戦布告が終了して雄一がAクラスから出ようとした時に翔子が出してきた提案が気になっていた。

その内容とは、「敗者は勝者の言つた内容に一つだけ従う」と言つものだった。

その際に翔子の鋭い視線が美波に注がれ、美波はいきなり自分に向かれた視線に困惑して暫く動くことが出来なかつた。

「分かりました。それでは両組の代表者は視聴覚室に移動して下さい

そう高橋教諭は言つと連絡を受けて視聴覚室で準備している日本史の飯田教諭に連絡。二人がそつちに向かつたことを告げた。

そして数分後、Aクラス最大の設備である黒板代わりの大型モニタ
ーに視聴覚室の様子が写しだされる。

『それでは大将戦の日本史特例勝負。内容は小学校6年レベルで制
限時間は小学校の授業時間に合わせて45分です。勿論カンニング
等の不正行為は即失格となりますので二人共大丈夫ですか?』

飯田教諭の問いかけに二人は肯定の意志を示し、ここにF組の下剋
上をかけた大勝負が始まった!

同時に、学園の転覆を企む一人の男はその目的を果たすべく準備をしていた。

自らの身体が危険な状態に晒されている」とも一切知らずに。

第22問（Aクラス戦？）（後書き）

次回、決着の時！

第23問（△クラス戦？）（前書き）

遅くて短くて「」めでなさい

少しキャラ崩壊してるかもしないです。

第23問（Aクラス戦？）

テスト開始から30分経過。

現在視聴覚室にて最後の試合が行われているが、その様子はAクラスの大型モニターに写しだされていて、その状況を見守ることが出来る。

Aクラス代表の翔子はその筆が止まることはなく、丁寧に答えていた。

一方の雄二はと言つと、こちらも筆は止まらずにスムーズに進めていたが、時々消しゴムで修正することが多いように感じられた。

「（春姉。雄一の奴は大丈夫かな？）」

『雄一が【たかが小学校レベルのテスト】と油断してなければ大丈夫だと思うけど、何かしら？ 何か嫌な予感しか感じなくなってきたわ』 （汗）』

「（もし、雄一が油断して負けたらどうしよう）」

『その時は代わりなさい』

「（どうして？）」

『もし負けたらね

「いつあるつもり」

「（大丈夫なの？ そんなことしたら雄一、死んじゃうんじゃない
？）」

『あまりに点数が低かつた時にしかやらないから安心していなさい
』

「（ハ、うん）（汗）」

春香は何時もの口調で明久に話していた と彼女は思つて
いたが、実際には笑顔の裏には表現することが出来ない何か恐ろし
いモノが大量に存在し、それが威圧感を放っていた。

なので明久は何とか春香に返事を返せたが、その内心は恐怖にさらされ歩いて、本当なら今すぐ逃げ出したい気分だった。

ただ明久にそれは出来ない。なぜなら春香と明久は一心同体の存在なのだから。

「（お願いだから早く時間が過ぎて……）」

しかし、運命といつものほ時に残酷である。

楽しい時は時間が早く感じ、嫌な時は時間が遅く感じるといつ【定め】からは何人たりとも決して逃れることは出来ないのであり。

第23問（Aクラス戦？）（後書き）

次は何時になるか分からないです。

こんな作品ですが、楽しみにしていただければ幸いです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4081p/>

僕とキミの召喚獣

2011年11月17日17時16分発行